

## 会 議 録

附属機関又は 会議体の名称		第2回 豊島区都市計画マスタープラン改定検討委員会
事務局（担当課）		都市計画課
開 催 日 時	平成24年9月11日（火） 18時00分から20時45分	
開 催 場 所	豊島区役所本庁舎第一委員会室	
議 題	(1) 都市づくりの基本理念・目標について (2) 将来都市構造と土地利用の方針について (3) 目的別都市づくりの方針について	
公開の 可否	会 議	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 一部非公開 傍聴人数 2人
		非公開・一部非公開の場合は、その理由
	会 議 録	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 一部非公開
		非公開・一部非公開の場合は、その理由
出席者	委 員	中川義英 中林一樹 中村陽一 柴田いづみ 長島眞 森永鈴江 上野容子 伊部知顕（代理出席） 外山克己 柳田好史 木崎禎一 松岡昭男 熊澤雄一 豊島区政策経営部長 豊島区都市整備部長 豊島区土木部長
	事 務 局	豊島区都市整備部都市計画課長 豊島区都市整備部都市計画課都市計画担当係長 豊島区都市整備部都市計画課都市計画担当係長（都市計画）主任主事
	そ の 他	日建設計総合研究所

## 審 議 経 過

### 1 開会

### 2 豊島区の特性・課題に関する追加データについて

事務局から説明した後、質疑応答を行った。主な発言は以下の通り。

#### 【委員】

豊島区の歴史のなかに目白の記載がない。街道があり交通の拠点として、目白駅は池袋駅より早く開業した。遡れば書くことは色々あるので、どこで切るかは難しいだろうが、江戸期から江戸の中核とのつながりについて記載があってもいい。

#### 【委員】

現在地に居住するようになった理由に、「親の代から住んでいるから」が多くて驚いた。「便利だから」だけではない、これからのまちづくりをやる上でよくおぼえておくべきことだと思う。

#### 【委員】

親の代から住んでいる人たちの、親は高齢化している。高齢の親を持つ子ども世代の子どもや孫の代は、外に出て戻ってこないパターンも多い。高齢者の単独世帯が増えていることも考えなければならない。

#### 【委員】

「現在地に居住するようになった理由」を聞いたアンケートから10年経過している。新たにやる意向はあるのか。次回やるとしたら、子育てをするのに適した地域なのかを質問事項に入れてほしい。

#### 【事務局】

都市計画マスタープランに関して昨年のアンケート調査では、居住理由の項目は入っていなかった。今後やるかどうかは検討させて欲しい。

#### 【副委員長】

国勢調査の「年代別の居住年数」の人口をみると、10代は「出生時から」が多いが、20代になると途端になくなる。せっかくここで生まれ育った子どもがいなくなる背景とは何か。大人になり、社会に出ていく時点で離れていってしまうところが気になる。

#### 【委員】

町会の例でいうと、高齢者の方が施設に入ったり亡くなったりした場合や、一人で

住んでいたが介護が必要になり子どものところへ行く、といった形で出て行ったときに、その子どもがその場所に戻ってこない。勤務地の問題や、他の場所に家を造ったなどで戻ってこないという話をよく聞く。

#### 【委員】

子どもが20代くらいで親が元気な頃は、住居のスペースの問題で一緒に住めない。そういう若い世代が、親の住む家の近辺で住居を探そうとすると、豊島区は利便性が良いので賃料が高く、所得と賃料の関係で住めない。そうすると近郊だと埼玉やその他の地域に出て行かざるをえない。家を購入してしまえば、中古市場が動かない日本の住宅事情によってそこに住み続けなければならないという現状がある。

一方で最近ではマンションブームもあり、40代50代で、子供の頃に住んでいて非常に便の良かった地元に戻ってくるパターンも多い。以前住んでいた人間からすると、豊島区はイメージが良いので戻ってくることも事実としてある。

#### 【副委員長】

資料の流入人口も他県からが多いが、豊島区育ちで現在は埼玉などに在住で、勤務地が豊島区というパターンも、あるかもしれない。そういう人たちが、今後区内に住めるような地域整備を目指す方向性について、潜在的ニーズがあるかもしれない。

#### 【委員】

元々住んでいた人がいなくなり、土地を売り細分化され、その細分化された土地に独立住宅が建てられる場合がある。そうすると庭なども狭小で緑の問題等色々起こる。40代50代の比較的若い方々はそういったところに来るが、地域での緑が減る等の問題が出てくる。

#### 【委員】

土地利用面積の推移は、これから地区別に計画を立てていく時に大事な指標となる。西側の地域と東側の地域の違い等、わかりやすくまとめて欲しい。

#### 【委員長】

宅地規模の推移等は調べられているものがあるのか。最低敷地規模のような話になる時に、中野区や横浜市のように、特定の地域では何㎡以下に分割して相続できないというような一種の規制を設ける等をするのか。

居住地選択の理由に関連して、住み替えのパターンがどうなっているのかは、住民基本台帳の個々のデータを追いかけていけばわからないことである。子どもが一度埼玉に行って、その後豊島区に戻るパターンがあるのかどうか等は、個別に調べなければわからない。場合によっては、ある特定のパターンが結構多そうだということで、今後の居住に対しての考えをまとめる必要があるのかもしれない。豊島区の特徴をまとめている部分を、もうすこし丁寧に追加して、それに対してどう考えるかも今後検討したほうがいい。

**【事務局】**

豊島区では都市計画道路の事業にあわせて、地区計画をかけている。その地区計画のなかでは最低敷地規模として 65 m<sup>2</sup>と設定している。

**【事務局】**

住宅土地統計調査より、平成 10 年と平成 15 年の 2 調査時点のデータだが、あまり狭小化の傾向はなく、50 m<sup>2</sup>未満の狭小敷地は減っている。地域的に細分化しているところなどはあるかもしれないが、統計データなのでそこまではわからない。

**【委員】**

昼間人口に対して夜間人口が少ない理由の一つに、事務所や会社の需要が多い地域である為、住居をオフィスとして貸してしまった経緯がある。特に 15 歳～64 歳の昼夜間人口の差が大きいことから、そういった傾向があることがわかる。

**【委員】**

マンションの高層化に伴うコミュニティ形成に関するいくつかの課題があるが、土地利用現況の面積と居住用に資する m<sup>2</sup>数はかなり違ってくるはずである。今後も土地の問題から、高層マンションが増えてくるなかで、同時に地域のコミュニティの形成を考えていかないと、人間関係の希薄性を増加させていくおそれがある。

**【委員長】**

新宿の東口商店街の例では、昔はオーナー同士が同級生で、友達でまちをつくってきた文化があり、それを取り戻そうと、周辺へ移り住んだオーナー達も住めるような開発をやろうとしている。

豊島区でも、ビルオーナー達が一緒に住めるような土地の使い方、計画のあり方も一つの柱として出てくるのかもしれない。地域別の方針になるのかもしれないが、念頭に置いて意見をまとめられたらいいと思う。

**【委員】**

過去に池袋を中心に調べたところ、新宿や渋谷と比較すると、オーナーがまだ地元に住る現状がある。この先もこのままかどうかは課題が残るが、違いを踏まえうえでどうすれば良いか議論したい。

**【副委員長】**

無理に戸建てを建てるのは、狭小敷地の問題等、住環境の面でも防災の面でも決して良い方向とはいえない。集合住宅化はやむをえない傾向があるが、コミュニティや地域のつながりを求めていくのであれば、マンション件数や戸数について賃貸と分譲を分けたデータが必要である。ファミリータイプのなかに、どれくらい分譲系と賃貸系があるのかによって、地域との関わり方にも差が出てくるかもしれない。

資料をみても、近年では圧倒的にマンションが建っている。業務用オフィスではテナントが入らない、入っても賃料がとれない最近の経済状況から、今後もマンションは増えるだろうが、それをいかに地域密着型、地域とのつながりを大事にするものにするのが課題だ。

分譲か賃貸かというのは一つの傾向が見られる。ファミリータイプといいながら、地域との縁がつかれない傾向があるのかもしれない。土地利用を見ても、住商併用も合わせると豊島区では集合住宅が圧倒的に多い。これをどのように今後のまちづくりで考えていくかが大きな課題だと改めて思った。

### 3 都市づくりの基本理念・目標について

事務局から説明した後、質疑応答を行った。主な発言は以下の通り。

#### 【委員代理】

安全安心は必要な条件であり、世相にもあっていると思う。東日本大震災以降、地域には自立が求められている。自助・共助・公助も必要ではあるが、できるだけ自立していくということが重要である。とくに地域でエネルギーをマネジメントするシステム、エネルギーの自立は盛り込んでいきたい要素の一つである。それが、安全安心につながっていく。防災としても、区民が自らできるかどうか非常に大切である。

「人々をひきつけ」とあるが、人をどれだけ集めるかは、これから豊島区だけでなく東京全体が考えなければいけないことだと思う。人を集めるには、安全安心が第一のキーワードとしてある。安全安心のためには、自分たちでどれだけ安心できるまちをつくれるかが重要なので、そういう意味での自立を考えている。

#### 【委員】

文言のなかの、「人々をひきつけ」はいらぬのではないかと。魅力があれば人は来るので、まずは魅力づくりをする、「将来世代に引き継ぐ魅力を備えた都市の創造」でよい気がする。

基本理念を実現するための目標の安全・安心のところ、災害だけでなく防犯でも安心して住めるまちであることが、住み続けられるまちではないか思っている。過去に、防犯と防災に対してアンケートをした時は、難しいものと考えられてはいけないうえ、最初の項目をなじみやすい「防犯」にしたところ、新住民である若いお母さん方の発言が活発となった。新しい住民の方々とコミュニティをつくっていく上でも重要なキーワードとなるので、「防犯」に対する項目を何か入れていただきたい。

#### 【委員】

理念の文言の「人々をひきつけ」の“ひきつけ”というのが感覚的な言葉で、様々な解釈の可能性があるのもう少し誰もが程度似たイメージを思い浮かべられるような、具体性を持った言葉に変えた方がいいのではないかと。

特に池袋周辺で危惧しているのは、土地勘の無い人たちが集合住宅に移り住んで来

て、更に単身世帯が増加するなかで、高齢単身率も 65 歳以上の孤立死も 23 区の平均を大きく上回っている状況である。「孤立」は、これから真剣に考えていかなければいけない課題である。

籠もってしまう可能性のある人たちを、いかにまちに出てきてもらうか、集まれるかを考える必要がある。孤立に対応した求心力のあるコミュニティ拠点について、もう少し意識的に文言に入れてもよいのではないかと思う。

また今の時代、豊島区はターミナルを抱える場所として、NPOやボランティア活動にとどまらず、区民によるコミュニティビジネスやソーシャルビジネスといった、地域を元気にする、活性化するような、自発的な市民事業を想定しているというニュアンスを入れた方がよい。

#### 【委員】

孤立をふせぐ為の地域の仕組みをどう作るか、社会福祉協議会等でも話し合いが進められている。豊島区では、区民ひろばを拠点にして小さな小地域を以て、助け合いの仕組みをどうつくっていくかを進めている。施策に入る時には、このような具体的な核をマスタープランに盛り込んでいただきたい。

何らかの理由で労働市場から排除されてしまった人たちが、自ら事業を興していくということも今注目されている。豊島区の場合も大都市の中心にある地域として、地元の、住んで働いていく生業をどのようにつくっていくかという視点も盛り込めるとよい。

#### 【委員】

都市マスなので、フィジカルプランにつながるわかりやすい理念・目標を掲げるべきである。議論されてきたことを、フィジカルプランとしてどう受け止めていくのが心配である。

#### 【委員代理】

理念について、自治体でつくるワードはかたく、長く、説明的に感じる。基本構想・基本計画は変えられないが、今回作るマスタープランでは、もっとキャッチーな、文章的ではないものにできないかと思う。より多くの人に触れてもらえるもの、区民にとって分かり易いものにした方がよい。

#### 【委員】

「ひきつける」というのは、豊島区に訪問したい、集いたい、訪れたい、学びたい、そういったものを一式この中に入れた形で記載していると思うので、そういった言葉を入れることが必要ではないか。

安全・安心のところで、「災害予防を推進する」のあとに被災後の復旧・復興となっているが、いかに被災を最小限におさめるか、いわゆる減災ということが入っているのか。短い言葉で表現するのは難しいと思うが、できれば入れて頂きたい。

**【委員】**

豊島区は、近くの新宿区や中野区と比べて特徴的なのは外国人だと思う。池袋のチャイナタウン等は刺激的で、そこから文化が生まれるような気がしている。フィジカルプランでどう応えるかは難しいだろうが強調したい。

**【委員】**

高齢者の孤立対策としての住宅、都市の仕組みを考えられないか。ある程度便利な場所に、一人住まいの高齢者を集められれば、行政としても分散している住民のケアをするよりはコストがかからなくなる。

**【委員】**

団塊世代が高齢者になってくるなかで、お年寄りのイメージが変わってきている。これからは、おしゃれでポップな高齢者がたくさん出てきて、そこを意識したまちをつくっていかないと結局その方々が生き生きできない。相変わらずの昔からの高齢者イメージに対応するような施設だけでは難しいだろう。先ほどの話にあった区民ひろばをよりバージョンアップして、新しいタイプの高齢者が、足を運べるようなまちづくりを考える必要がある。住居の問題は一朝一夕にできないので、せめて家のなかに籠もらないで済むように、もっと外に出て、歩いて、移動して行きたい場所が、まちなかに拠点的にあるような形が必要である。

現在私は、インクルーシブデザインのまちなちのあり方を実現したいと動いている。インクルーシブとは、包摂する、包み込むという日本語に近いが、大きな特徴として、ユニバーサルデザインでの皆同じにして使いやすくするという考え方とは別に、違いや差異はそのまま認めるという考えである。外国人が多く、高齢者が多いまち、障がい者もいる、そういう中で差異はそのまま、対等にまちで生きていけるようなイメージである。豊島区が他に先がけて、インクルーシブという言葉を使うかどうかは別として、差異のある人たちを包み込めるようなまちづくりを打ち出していかれたらどうかと思っている。

**【委員】**

居住支援協議会の空き家対策のなかで、複数の団体から助成金を得てコミュニティビジネスとして地域サロンをやっている。誰でも出入り自由な空間をつくり、サロンの形でコミュニティを形成させていき、空き家を埋めるモデル事業である。

基本理念も目標も一番大事なことは、主役は誰かということ。5W1Hがはっきりしないと何も言えない。最終的に誰がどうやって何をすべきかがきちっと盛り込まれないといけない。

目標のなかでは「(4) 協働と政策連携」に一番興味があるが、連携していくだけではなく、豊島区には任せても大丈夫な人材が既にいて、ネットワークもできている。問題は同時に人づくりをしっかりしていかないと、次の展開では良いものはできないことである。豊島区らしさが出たやり方をする為には、若者や豊島区を大事にしている大先輩方の意見をうまく取り入れる仕組み、年代を超えたコミュニティを形成する

拠点が、各地でサテライト的にできていくことを望んでいる。

#### 【委員長】

理念・目標のところ、具体性につながるようなことを入れておくべきだろう。5 W 1 H、または6 W 4 H 1 Dで、Do をちゃんと入れないといけないと言われる時代である。

#### 【委員】

進め方について、マスタープランには理念が大事ということを変更して認識したが、理念から具体的に Do の部分をリンクさせていって、もう一度基本理念に戻らざるをえないところもあるのではないか。どの段階でどこまで議論して、落としどころをつくっておくのか曖昧である。時間に限りがある中で、進行と絡めて各回の目的、一番大事なところはどこなのかを明確にして欲しい。

#### 【委員長】

基本理念・目標は今の時点での仮置きになると思う。この先、政策別まちづくり方針等を具体的に議論していくが、それらを踏まえた時に理念の文言は果たしてこれいいのか適宜見直しができるようお願いしたい。今回の議論・意見を元に修正を加えたうえで事務局から再提示してもらおうが、それが FIX されるものではない。最終決定はおそらく、地区別課題の前になるだろうと考えている。

#### 【副委員長】

目標の「(4) 協働と連携」が特に大事だと思う。東京のなかでも活発な、活性化している区の一つである豊島区として、すでに色々なものが動いている状況のなかで、Do をどうコントロールしてまちづくりに結びつけるかが一つのポイントである。

「魅力ある」というのは、区民にとっても、事業者にとっても魅力がないといけないだろう。事業者が企業活動等をやろうというときに、まちづくりの視点からは、私たちはこういうまちづくりをしようとしているので協力してくださいと言えるものが、マスタープランの持つ意味である。思いつきで協力依頼をしているわけではなく、人に要請するのだから、自らもそれを以て実現に向かっていこう、というのが区民の役割である。

「協働」とあるが、受け取る側によってイメージが違うので、ここは議論を踏まえてもう少し詰めなければいけない。パートナーシップという人もいれば、コラボレーションという人もいて、その二つの中身は全然違う。パートナーシップの場合、行政が発すると、行政のパートナーシップになってくださいとなり、コラボレーションとなれば、行政だけでなく企業や区民とのコラボレーションという可能性もあり、様々なコラボレーション、組み合わせがある。基本理念と目標は、まちづくりの主役をどのようにイメージして、その人たちにどういう方向に向かって何をしてもらいたいかをきちんとまとめるべきものと思う。



**【委員長】**

別の機会で使った、「ともに未来へ ともにまちへ」では“ともに”に色々な意味を持たせたという例がある。区民との協働、行政との協働、一緒に未来へ行きましょう、一緒にまちに出ていきましょう、まちをつくっていきましょうと様々な受け取り方ができるキャッチコピーとして使った経緯がある。一方でフィジカルプランの要素との絡みや目標とのバランス等があるので、本日の議論を踏まえて修正等をお願いし、今後も検討したい。

**【委員】**

個人的に、「共動（ともにうごく）」できょうどうと読ませる造語を使っている。「概念を共有して地域で動きなさい」ではなく、地元のことを考えて動いて、そこから理念ができ、社会を動かしていくという逆の動きもあるのではないかと思う。共に動くことが大事である。

## 4 将来都市像と土地利用方針について

## 5 政策課題別まちづくり方針について

事務局から説明した後、質疑応答を行った。主な発言は以下の通り。

**【委員】**

どうして拠点を3種類に分けたのかわからない。例えば巣鴨では、観光地としての集客、交流だけではなく住んでいる人もたくさんいる。

また、土地利用の方針は地区別に行くときに重要であるが、エリアの分け方がはっきりしない。「落ち着いた暮らしのまち」と「親しみやすい暮らしのまち」というのは前回の踏襲らしいが、よくわからない。分ける根拠をしっかりと書かないと沿道整備等の事業時に、容積率の緩和や、用途はどうするのかという話になった場合、地区別では耐えられない。目標のなかに土地利用方針を入れたとしても、中身は精緻につくっていただきたい。

**【委員】**

都市計画審議会等の関連委員会で審議されていることとの関連性がどこにあるのか、マスタープラン独自のものは何かということが気になる。マスタープランで掲げても、他がどうなっているのかわからないので、みどりマスや交通マス等、関連して見られる資料が必要かと思う。

**【事務局】**

都市計画マスタープランはまちづくりのなかで最上位の計画になり、都市計画を決定するときの根拠になるもの。策定年次が前後するものとは整合性をはかりながら、状況の変化に応じて対応していくことになる。

**【委員】**

将来都市像のなかで、副都心と広域の連携軸に有楽町線の有楽町方面が現行の図にも改定案にもない理由は何か。

**【事務局】**

副都心と広域の連携軸というのは、池袋副都心とその他の拠点をつなぎ連携する意味合いから位置づけており、有楽町線の駅、例えば護国寺などは他区になることもあって、位置づけられないという理由から表現されていない。

**【事務局】**

現在、有楽町線の東池袋駅は池袋に含めて考えている。それを副都心とは別に小さな拠点として置くとすれば、これを結ぶとする。平成 22 年に策定した池袋副都心整備ガイドプランでは、副都心全体の中でやろうとしているので、ここでも副都心と一体として整理をしている。

**【委員長】**

日の出通りについては、文京区の都市計画マスタープランでどう位置づけられているかあらためて確認して欲しい。

**【委員】**

今後、副都心の部分だけをピックアップしたものを作るのか。副都心のイメージを絵として出すのか。

**【事務局】**

将来都市像は、どういう骨格を都市構造とするのかを示している。政策目的別まちづくりの方針のなかで、副都心の再生というのは豊島区にとって重要なことであるので、そこで書き込んでいきたい。

**【副委員長】**

こういう将来都市像を考える時に、点と線と面で考えなければならない。拠点は点、軸などは線・繋ぐもの、全体・まちとしてどうするかについては面ということで、その 3 つに書き分けている。点を大きく描いたからといって面になるわけではない。点と面が重なる部分、例えば「副都心周辺の便利な暮らしのまち」という面のなかに、副都心という広域拠点を配置すると、便利な暮らしと副都心整備とのバランス、取り合いをどうするのかという課題が発生してくる。

これはイメージを示している図で、些末な話ではないので、それをうまく表現しないといけない。しっかりと点と線と面の持っている意味を説明しなければいけない。特に豊島区は入り組んでいて、6 つの区と隣接しているので、隣の区はどんなまちづくりをしようとしているのかを睨みながら、豊島区としては面積が小さくても、キラリと輝くまちをつくるのだということを示していくことが大事になる。特に線では、隣接区とのつながりという意味では重要である。

この絵を見た時にわかりにくい、どう理解するのかと思うのは、ゾーンなどのネーミングである。将来こういうものにしたいという目標を示している将来都市像なのか、現在こういう特徴があるので、こういうまちなのだと知っているのかわからない。特に「落ち着いた暮らしのまち」と、「親しみやすい暮らしのまち」というのは目標なのか、現状を言っているのか、よくわからない。都市計画的に言えば、左側は木造密集市街地で、基盤がまだ十分ではないところがあり、いかに基盤を充実させるかという課題があるが、そういった課題と、目標とする姿との間のつなぎを説明しなければいけない。将来目標という都市像とは何かということを、改定なので従前とまったく違うものは出しにくいかもしれないが、もう一度つなぎの論理を整理したほうがよい。そのなかで特に、副都心の周辺で「便利な暮らしのまち」というのは目標なのか、現状なのか、目標としては「暮らしのまち」として本当にこのエリアを整備していかうと考えていくのか、暮らしよりは副都心性に重きを置いた整備を区としてやるのか、ここが非常に曖昧だと思う。

**【委員】**

みどりの拠点について、学習院大学と立教大学で点の大きさを変える必要があるのか。

街路樹をここでは描かないとのことだが、池袋駅東側の街路樹などは豊島区にとって特別なみどりだと思うので、どのように記述するべきかは課題だ。

**【委員】**

なぜ公園の表現がなくなってしまったのか。緑被率が低いなかでも、23区内で他にない公園づくりを行っているので、公園をフィーチャーすることを豊島区では考えた方がいい。

**【副委員長】**

豊島区全体の都市構造という話でありスケールが違うということで、今回は小さい「主なみどりと広場の拠点」と「みどりの骨格軸」を外したのだろうと都合良く解釈した。都合良くというのは、外しっぱなしでいいということではなく、地区別のまちづくり方針で、このまちにとって公園がいかに重要か、それをどうつなぐかという議論が各地区から出てくれば、それを踏まえてもう一度、全体の都市像に入れこむべきなのかどうか話し合う必要があるということである。各地域で共通する課題であれば、全体の都市像に入れることも必要になるだろうし、特定の地区だけの課題や要望であれば、地区別の方針に位置づけようということになる。

将来都市像は、3つの拠点の区分も含めて、地区別方針のなかで、各駅周辺の人たちがどんなまちづくりをしたいか、それを踏まえてもう一度全体像を考えてみるなど、フィードバックすることを前提に今回の提案があるのではないかと捉えている。

**【委員】**

みどりの骨格軸は無くなったのではなく、都市道路軸と名前が変わっただけではな

いのか。

また、「副都心と広域の連携軸」というのは一体何なのかわからない。

**【副委員長】**

都市道路軸とみどりの軸は、確実には一致していない。街路樹や都市緑化の考え方として、将来、軸線は全て電線の地中化をして、街路樹は未剪定にするということを言わないと本当のみどりの骨格軸にはならない。その辺をどう考えていくのか。

**【委員】**

言葉の使い方で、「拠点」という言葉のイメージが狭すぎる気がする。一つの店舗や、広くても半径 50mと捉えられるので、ここで拠点という言葉を使うことが相応しいのかわからない。

**【委員長】**

拠点という言葉の整理をどのようにするか、生活中心、地域中心のそのあとにただ「～拠点」と付けているだけというものもあると思うので、考えていく必要がある。ここでは基本的に、公共交通、駅を中心とした拠点形成を謳っている。それが良いのかどうか、個人的には思うこともある。

**【副委員長】**

点と面は何が違うか。つまり拠点とゾーンは何が違うか。拠点は真ん中に集まる力を基につくる。一方で面、ゾーンは分散する、広げていくという考え方。よって池袋の拠点性を高めるといえるのは、いかに池袋駅の周辺に人を集めるかを考えないといけない。全部住宅を排除して、池袋が全てになったら拠点として最高かといったら決してそうは思わない。使う人、利用する人がいて初めて拠点があるので、可能なかぎり集中型にする。ゾーンはむしろ集約されないように、きちんと広げて行くような考え方で形成するので、そこが違う。拠点を大きく描いたらどうのということではないはずである。大きいというのは、より高い集積を求めているという意味でしかないと思っている。

**【委員】**

地名の表示は町名ではなくもっと大きな括りにしているが、何か意図があるのか。見る人にとっては、自分の住んでいる町丁名の方がわかりやすい。

**【事務局】**

現行の都市計画マスタープランの地区区分の名前になっている。これについてもご議論いただきたい。

**【副委員長】**

政策目的別まちづくり方針の矢印は疑問がある。全体のつくり方を見ると、改定の

基本方針があって、それを基本理念にどう展開して、そこから都市像をどう描いて、更に都市づくり方針に降りてくるのか、相互の関連性がないと、繋がりがなく、基本理念や将来像が宙に浮いているようになってしまう。

先ほど基本理念で、一番重要だと思う4番目の中身に政策連携と書いてある。ところが次回やるものが「政策目的別方針」となっていて、連携とまったく相反する概念で都市づくり方針を書くのだと言っているようにも読める。

中身としては防災という事前の取り組みだけではなく、減災、事後の対応をきちんとする為に準備をする、さらに復旧復興まで前もって準備しておこうなど、災害に強い都市づくり方針というキャッチフレーズのなかで、様々なハードウェアとソフトウェアを考えているように読める。要援護者の方をみんなで支え合い、共に生き延びるための仕組みとしてのソフトウェアづくりと同時に、それを確保する避難場所や空間をきちんと整備していくということ、福祉や社会教育あるいは学校教育も含めて一緒に考えて災害に強い都市をつくりましょうというところにつながるのだと思う。

防災都市づくりは防災課の仕事、あるいは都市計画でいう防災だけの話と捉えられないようにしたい。住環境整備の方針も、インクルーシブデザインという考え方からすると、単に住宅をどう作るかではなく、住宅をみんなでどう暮らし合っていくかということこそ問題なのだと考える。すると、政策連携で目指すべき住まいのあり方や、政策連携で目指すべき防災のあり方など、そういったことが読み取れるような書きぶりが、政策連携による都市づくりに相応しいと区民の皆さんに読んで頂けるかと思う。次回の準備をしていただくときにその辺も配慮して欲しい。

#### 【委員長】

色々な意見が出た方がいいと思い、つい議論が長くなってしまふ。委員会の回数を一回増やすことも可能かどうか検討したい。

#### 6 今後のスケジュールについて

事務局より、第3回改定検討委員会は、11月中旬頃開催される旨説明した。

会議の結果	・本日の議論の結果を踏まえ、継続して改定作業を行う。
提出された資料等	資料1 豊島区都市計画マスタープラン改定の検討状況 資料2 都市づくりの基本理念と目標 資料3 将来都市像と土地利用方針 資料4 政策目的別まちづくり方針 資料5 防災都市づくりの方針構成案 参考資料 豊島区の特性・課題に関する追加データ
その他	